

マーティン・ルーサー・キング・ジュニア が夢見た世界： キングの夢を引き継ぐための考察

大 橋 稔

はじめに

マーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King, Jr.: 1929 年 1 月 15 日～1968 年 4 月 4 日、以下キングと表記) は、アメリカ合衆国で 1950 年代半ばに始まるアメリカ黒人の権利獲得運動である公民権運動の代表的な指導者の一人である。暴力が蔓延する時代において、人種平等達成のための非暴力運動を提唱し率いた指導者として、日本の教科書などには紹介されている。63 年 8 月の「わたしには夢がある」スピーチは英語の教科書などで紹介されているため、夢を語ったアメリカ黒人の指導者として、日本の学生には特に記憶されているのかもしれない。

合衆国内では、1983 年 11 月レーガン政権下で 1 月の第 3 月曜日をキング牧師記念日として祝日とすることが決定され、86 年 1 月 20 日より記念日として祝われている。2011 年 10 月にはワシントン DC のナショナルモールに記念碑が完成し、没後 50 年となる 18 年 4 月 4 日には全米各地で記念行事が執り行われた。現在でもキングの意思を引き継ぐ努力が、合衆国内ではなされていると言えるだろう。また世界に目を向ければ、1964 年のノーベル平和賞受賞者

となったほか、キングの名を冠した道路や記念碑が世界各地で作られてもいる。これらのことはキングの意思を引き継ぐ努力が、世界的な規模でなされていることを示している。またその方法は、ロンドンのウェストミンスター寺院が「20世紀の10人の殉教者」として讃えていることが象徴しているように、キングを神格化しているとも言えるだろう。

しかしここで問題となるのは、キングを神格化し、記念日を制定してまで引き継ごうとしているキングの意思の内容である。ロナルド・レーガンは、キング牧師記念日を制定する法案に署名したとき、次のように示した。

Dr. King's work brought him to this city often. And in one sweltering August day in 1963, he addressed a quarter of a million people at the Lincoln Memorial. If American history grows from two centuries to twenty, his words that day will never be forgotten. "I have a dream that one day on the red hills of Georgia, the sons of former slaves and the sons of former slave owners will be able to sit down together at the table of brotherhood."

In 1968 Martin Luther King was gunned down by a brutal assassin, his life cut short at the age of 39. But those 39 short years had changed America forever.⁽¹⁾

続いてレーガンは、公民権運動が成し遂げたものとして1964年の公民権法と65年の投票権法に触れてはいる。しかしレーガンが示したキングの業績に従って考えるなら、「わたしには夢がある」スピーチのあとキングは何もなせずに暗殺されたことになる。日本における一般的な理解も、これに近いものであろう。合衆国政府が記憶しようとしたキングとは、アメリカ黒人と白人の人種的平等を求めて活動した人物であることになる。

しかしキングは暗殺されるその日まで夢を持ち、その実現に向けて精力的に活動が続けていた。この期間のキングの活動を欠落させたままキングの意思を引き継ぐことは、キングの意思を正しく引き継ぐことになるのであろうか。キングの意思は、「わたしには夢がある」で十分に示されていたのであり、それ以後のキングの活動はこの夢を繰り返し求め続けていたと考えて良いのだろうか。

キングを公的な記憶として定位させる過程において、キングの意思が脱政治化されていたことは、既に多くの研究が明らかにしてきた⁽²⁾。そのため本稿では、キングに関する公共の記憶が脱政治化されていることの問題点については、議論の対象外とする。今日的な社会、世界の状況下において、キングの意思をどのようなものとして理解し、どのような夢を引き継ぐことが必要なのかを検討することを本稿の目的とする。

『自由を創造した人々の闘い アフリカ系アメリカ人』の著者であるウォルター・マイヤーズは過去を学ぶことの意義について次のように示している。

過去の闘いの証人として生き残った人々は、現在の私たちを知るための指針である。私たちの先祖に加わった人々は、闘いにも、また私たちの豊かな文化にも生き続けている。私たちはお互いに、永遠に私たちの歴史とつながっている。一人ひとりにとって、それは始まりであり、そして続いていく。(242)

わたしたちが生きる今は、先人たちが成し遂げたことを継承し、あるいは否定することによって造られている。そしてその行為が、未来を創ることになる。このような考えのもと、世界に向けて発した「脱政治化」されていないキングの声を、今日を生きるわたしたちの歴史や文化と接続する必要があるのか否かを検討することが本稿の試みである。

本稿では1964年以降のキングのスピーチを主に分析し、キングの主張、キングの夢に変化があったのか否かを明らかにする。この分析を通じてキングの夢の全体像を検討し、キングの夢を引き継ぐことの今日的妥当性、意味について言及したい。

I. ノーベル平和賞受賞者としての夢

1964年7月、合衆国の南部地域で合法的に行われていた人種隔離に終止符を打つことになる公民権法が成立した。これにより合衆国南部で行われていたアメリカ黒人の権利獲得運動である公民権運動は、一応の成果を手にしたことになる。1950年代半ばから始まる狭義の公民権運動は、「モンゴメリー・バス・ボイコット運動」⁽³⁾がそうであったように、人種隔離政策の撤廃を求める運動だったからだ。

この公民権運動によりアメリカ黒人は、非暴力による草の根の直接抵抗という運動の手段を生み出し、そしてそれを実施したと言える。暴力に支配された時代において、市民による非暴力運動が一定の成果を得ることができたことは、世界から希望として受け入れられたのかもしれない。64年10月、キングにノーベル平和賞が授与されることが決定したのである。受賞理由に掲げられたのは、「アメリカ合衆国における人種偏見を終わらせるための非暴力抵抗運動」であった。

12月には授与式と、それに続いて記念スピーチが行われた。このスピーチにおいてキングは、次のように述べている。

I accept the Nobel Prize for Peace at a moment when twenty-two million Negroes of the United States are engaged in a creative battle to end the long night of racial injustice. I accept this award on behalf of a civil

rights movement which is moving with determination and a majestic scorn for risk and danger to establish a reign of freedom and a rule of justice. (105)⁽⁴⁾

キングはこの一節で、公民権運動が何であるかを端的に示している。キングにとって公民権運動とは、合衆国における長い人種的不正義に終止符を打つためのアメリカ黒人の闘いであり、自由の統治と正義の支配を打ち立てるための運動であった。そして大切なことは、公民権法が既に成立した後に行われたこのスピーチにおいて、公民権運動に参加している2,200万の黒人の存在を過去形ではなく現在形で語っていることである。このことは公民権運動が公民権法の成立によって終わるものではないとキングが考えていることを示している。ゆえにキングはこの後、実際にアメリカ黒人が直面してきた具体的な苦難を過去形を用いて紹介し、さらに続けて次のように述べている。

Therefore, I must ask why this prize is awarded to a movement which is beleaguered and committed to unrelenting struggle, and to a movement which has not yet won the very peace and brotherhood which is the essence of the Nobel Prize. (105-106)

キングにとって公民権運動は未完の運動であり、粘り強く続けられている現在形の運動だったのである。キングは、ノーベル賞の根幹とも言える真の平和や兄弟愛を実現させていない運動に平和賞が授与されることの意味を問わざるを得なかった。そしてその自問を経てたどり着いたのが、次のような考えだった。

After contemplation, I conclude that this award, which I receive on

behalf of that movement, is a profound recognition that nonviolence is the answer to the crucial political and moral questions of our time: the need for man to overcome oppression and violence without resorting to violence and oppression. (106)

非暴力を運動手段とした公民権運動は、公民権法の成立という果実をアメリカ黒人にもたらした。公民権法は、アメリカ黒人が抱えるすべての問題の解決策とはなり得なかったのかもしれない。しかしそれでも圧倒的な人種的不正義と暴力が横行する合衆国の南部社会を変え得るのかもしれないという希望を見出すものではあった。そして公民権運動は、世界中に横行している不正義に対抗する手段としての非暴力運動の可能性として世界に希望を与えたのである。その功績が認められてノーベル平和賞が贈られることになったのだとキングは考えたのだ。

つまりキングは、ノーベル平和賞を受賞することによって非暴力運動が国際的に認められたと認識するに至ったのである。そしてこのような認識はキングに変化をもたらした。キングの視線は、合衆国南部において苦しめられているアメリカ黒人だけではなく、合衆国で苦しむすべての人々、さらには世界の人々へと向けられるようになるのである。もちろんキングの視線は、以前から世界中の人々の苦しみに向けられていた。ノーベル平和賞を受賞したことは、世界に蔓延している不正義の問題と非暴力を関連させて行動するよう、キングの背を押すことになったのである。

『夢か悪夢か・キング牧師とマルコムX』の著者ジェームズ・H・コーンは、ノーベル平和賞を受賞した影響について、「キングの名は世界中の家庭で語られる名となり、世界の指導者たちは多くの問題で彼の意見を求めた」(130)とし、キングが合衆国内だけではなく、世界の問題に関与し得る立場に押し上げたことを指摘している。さらにコーンは、「ノーベル平和賞以後

は、キングはもはや迷うことができないことを悟った」(131)とし、暴力なしに悪との闘いを進めることができることを示した西欧世界最初の人、黒人解放運動のシンボルとして選ばれたキングは、「そこから逃れることはできなかった」(131)と、受賞の影響について指摘している。

それゆえスピーチの後半においてキングは、公民権運動に関わる人々の代表としてだけでなく、「I accept this prize on behalf of all men who love peace and brotherhood」(平和と兄弟愛を愛するすべての人々の代表としてこの賞を受け取る)(108)としているのだ。またキングは、「I come to Oslo as a trustee, inspired and with renewed dedication to humanity」(人類に貢献したいという新しい志を抱き鼓舞された受託者としてオスロにやって来た)(108)とも述べており、ノーベル賞受賞者としてのキングは、世界に蔓延している不正義に対抗するための声を発するようになるのである。

このスピーチにおいてキングは、目指すべき世界の姿を具体的に示している。

Sooner or later, all the peoples of the world will have to discover a way to live together in peace, and thereby transform this pending cosmic elegy into a creative psalm of brotherhood. If this is to be achieved, man must evolve for all human conflict a method which rejects revenge, aggression, and retaliation. The foundation of such a method is love. (106)

キングは、愛に満ちた共生の社会を目指すべき社会としているのだ。そしてそのような社会では、対立の解決策として復讐、攻撃、報復は用いられず、また哀歌ではなく兄弟愛の賛歌が歌われるのだ。またそのような社会でキングは、

I have the audacity to believe that peoples everywhere can have three meals a day for their bodies, education and culture for their minds, and dignity, equality, and freedom for their spirits. (107)

だとしている。人種的不正義だけではなく、貧困や争い、つまり戦争を克服するために挑むことをキングは、ノーベル賞受賞者として取り組まなければならない課題として提示したのである。

Ⅱ. 人種的不正義の克服という夢

1965年1月、キングはアラバマ州セルマで新しい運動を開始した。アメリカ黒人の有権者登録の促進と投票権法の獲得を目指した「アラバマ・プロジェクト」⁽⁵⁾である。アメリカ黒人の有権者登録が人種差別的な制度運用によって妨害されていたため、有権者登録を推進する活動はアメリカ黒人の権利獲得運動において常に大きな関心事であった。キングはダラス郡の郡庁所在地であるセルマを闘争の地として選んだのであった。

キングは以前から、人種的不正義が撤廃されるためには、選挙権の行使がアメリカ黒人に対して公平に担保されることが必要であることを認識していた。1957年5月に行われた自由のための祈りの巡礼でのスピーチで次のように語っている。

Give us the ballot, and we will no longer have to worry the federal government about our basic rights.

Give us the ballot, and we will no longer plead to the federal government for passage of an anti-lynching law; we will by the power of our

vote write the law on the statute books of the South and bring an end to the dastardly acts of the hooded perpetrators of violence. (48)

ここでキングは「ballot（投票用紙）を与えよ」と訴えている。しかし制度上は既にアメリカ黒人の投票権は法的に認められた権利であった。その権利が、人種差別的な運用によって行使できない状況に追い込まれていたのである。よってキングが主張する「投票用紙を与えよ」とは、「公平な有権者登録を確保し、投票権を行使させよ」と理解すべきであろう。そしてアメリカ黒人が投票権を公正に行使できるようになるならば、さまざまな人種的不正義が解決するだろうとキングは主張しているのだ。

投票権の公正な行使によってもたらされる変化についてさらに続けて指摘している。

... we will transform the salient misdeeds of bloodthirsty mobs into the calculated good deeds of orderly citizens.

... we will fill our legislative halls with men of goodwill

... we will place judges on the benches of the South who will do justly and love mercy

... we will place at the head of the southern states governors who will, who have felt not only the tang of the human, but the glow of the Divine

... we will quietly and nonviolently, without rancor or bitterness, implement the Supreme Court's decision of May seventeenth, 1954. (48)

ここでキングが指摘しているのは、人種的不正義が払拭された社会だと言えるが、それは当時の合衆国南部に存在する人種的不正義の状況を示しているとも言える。つまり当時の合衆国南部の社会は、一般社会のみならず、立

法、司法、行政のいずれにおいても人種的正義からは程遠い状況にあったのである。

このような人種的不正義は人種隔離政策によって維持されていた。そのため南部社会の人種隔離政策が非合法化されれば、このような状況は改善されるものと信じ、公民権運動の活動家、支持者たちは公民権法の成立を求めて運動してきたのだ。しかし実際には、公民権法の成立後も人種的不正義は残存し続けていた。そこでキングはアラバマ・プロジェクトに着手し、有権者登録が制度として人種間において公平に運用されることを定める投票権法の成立を求める運動を開始したのである。

さてセルマでの運動は多くの困難を伴った。その困難を乗り越えて実現した「セルマからモンゴメリーへの行進」⁽⁶⁾の最後でキングは、運動を総括するようなスピーチを行っている。ここでキングは、モンゴメリーのバス・ボイコット運動によって公民権運動が始まり、バーミングハムでの闘争が白人の意識を目覚めさせたことを指摘している。そして白人のアメリカの良心を揺さぶる運動が常にアラバマ州で展開されてきたことを指摘し、セルマでの闘争もまた白人の良心を揺さぶっていることを語った。

White America was profoundly aroused by Birmingham because it witnessed the whole community of Negroes facing terror and brutality with majestic scorn and heroic courage. And from the wells of this democratic spirit, the nation finally forced Congress to write legislation, in the hope that it would eradicate the stain of Birmingham. The Civil Rights Act of 1964 gave Negroes some part of their rightful dignity, but without the vote it was dignity without strength. (120-121)

このようにキングは、公民権法を補完し人種的不正義を是正するためには、

アメリカ黒人が投票権を正当に行使できることが不可欠であることを指摘している。さらにキングは、歴史家のC・バン・ウッドワードの *The Strange Career of Jim Crow* (1955) に基づきながら、合衆国南部における人種隔離の起源について言及する。その起源が、はるか遠い時代にあるのではなく、奴隷解放が一つの争点となった南北戦争後の、南部再建期にあることを示したキングは、続けて次のように語る。

they [leaders of the Populist Movement] began uniting the Negro and white masses into a voting bloc that threatened to drive the Bourbon interests from the command posts of political power in the South.

To meet this threat, the southern aristocracy began immediately to engineer this development of a segregated society. (123)⁽⁷⁾

キングは、人種隔離が必要となった理由が白人大衆と元奴隷であるアメリカ黒人とを分断させることにあったことを示し、さらに両者を分断させなければならなかった理由が、南部社会における保守主義者、貴族階級の政治的な権力を守るためであったことを指摘した。新興の白人大衆勢力と解放奴隷たちは、彼らの持つ投票権を行使することで、支配者階級の政治的権力を抑制し、あるいはそれを奪い取ることで、彼らの主張を通そうとしていた。それを妨害する手段として、両者を分断させるために人種隔離が取り入れられたのだ。つまり人種隔離の結果として投票権の行使が制限されていたのではなく、投票権の行使を邪魔するために人種隔離政策が始まったのである。

このように人種隔離の歴史を捉え直すとき、人種隔離政策の撤廃が認められただけでは不十分だとするキングの訴えは、当然の訴えとなる。人種隔離の根源としての投票権行使の人種差別的な制限という問題を解決しなければ、問題の本質的な解決にはなり得ないからである。またこのスピーチにおいて

キングが白人の心を揺さぶることの必要性を強調しているのも、白人が政治権力を牛耳っているからだけではないことがわかる。白人大衆はそもそもアメリカ黒人から分断させられてしまった共闘者なのであり、特権階級の思惑によって人種差別主義者へと変えられてしまった存在なのである。ゆえにキングは次のように呼びかける。

On our part we must pay our profound respect to the white Americans who cherish their democratic traditions over the ugly customs and privileges of generations and come forth boldly to join hands with us.
(122)

キングは人種差別主義を乗り越えようとするアメリカ白人に深い敬意を払うよう、アメリカ黒人に対して呼び掛けているのである。キングの非暴力による運動は、法律の獲得という制度的な変化をもたらすことはできるが、実際の差別は心の奥深くに根付いているものである。そして心に巣食った差別意識を解きほぐすためにはより長い時間を必要とする。白人と敵対するのではなく、仲間として共闘の道を探ることは長期的な展望において変化を確実にもたらすためにも必要なことだったのだ。『マーティン・ルーサー・キング』の著者マーシャル・フレディは、投票権法成立から15年後の南部社会を「一世紀がたったかと思われるような変わりようであった」（187）と記している。投票権を求め、白人との共闘を求めたキングの運動は、合衆国南部社会に確実な変化をもたらしたのである。

Ⅲ. 貧困の撲滅という夢

貧困の撲滅は、キングが最晩年に精力的に取り組もうとしていた問題の一

つである。1967年11月、キングが会長を務める南部キリスト教指導者会議が翌68年4月に「貧者の行進」⁽⁸⁾をワシントンDCにおいて行う計画を発表した。そしてキングはこの計画を成功させるために精力的な活動を行いつつ、人種的不正義の解消を目指す従来の運動でも先頭に立ち続けた。行進の支援拡大のために全国を駆け巡りながら、その合間を縫うようにして68年2月に始まるテネシー州メンフィスでの黒人清掃労働者によるストライキ運動⁽⁹⁾を支援し、3月にはデモ行進の先頭にも立っていた。そして4月4日、このメンフィスで凶弾に倒れ、39年の生涯を終えるのである⁽¹⁰⁾。

まさにキングにとって貧困の撲滅という夢は、晩年に精力を傾け、暗殺によって道半ばで挫折させられた夢であったと言える。しかしこの問題は、キングが常に関心を持ち続けてきた問題でもあった。先に紹介したセルマからモンゴメリーへの行進でのスピーチでも、キングは貧困問題について多くの時間を割いていた。南部再建期に白人大衆と黒人大衆とが連帯を模索していたことは既に述べたが、なぜ彼らは連帯を目指すことができたのか。その背景に存在していたのがまさに貧困問題であったとキングは指摘している。

the segregation of the races was really a political stratagem employed by the emerging Bourbon interests in the South to keep the southern masses divided and southern labor the cheapest in the land. You see, it was a simple thing to keep the poor white masses working for near-starvation wages in the years that followed the Civil War. Why, if the poor white plantation or mill worker became dissatisfied with his low wages, the plantation or mill owner would merely threaten to fire him and hire a former Negro slave and pay him even less. Thus, the southern wage level was kept almost unbearably low.

Toward the end of the Reconstruction era, something very significant

happened. There developed what was known as the Populist Movement. The leaders of this movement began awakening the poor white masses and the former Negro slaves to the fact that they were being fleeced by the emerging Bourbon interests. (122-123)

南部再建期の合衆国南部で生じた白人市民の貧困問題。白人の貧困層を低賃金で労働させるために利用されていたのが、より安い賃金で働かされる元奴隷であるアメリカ黒人であった。この構造に両者が気づかされたとき、彼らは連帯し、より良い社会を作るために力を発揮しようとした。しかし保守的な貴族階級はその連帯行動を阻むために人種隔離制度を導入し、両者を分断させることを画策したのである。

この分断は、白人貧困層には人種差別主義を与えたとキングは指摘する。つまりどんなに貧しくとも、白人は黒人ではないという意識を植えつけ、そこに優越感を与えることで、貧困問題から目を逸らせようとしたのである。そして黒人からは経済的不正義を正すための仲間を奪い、黒人はすべてから隔離されるようになったのだ。

このことから明らかになるのは、キングは貧困という問題を、アメリカ黒人という枠組みだけで考えていたわけではないことである。アメリカ黒人が黒人であるために職を追われ、低賃金労働に就かざるを得ない状況だけを見るならば、貧困問題は人種の問題であり、黒人の問題である。しかし貧困に悩むアメリカの白人が常に存在しており、そして貧困がアメリカ白人を人種主義者へと導いていたのである。この構造を認識したとき、キングにとって貧困撲滅の問題は、黒人のみの問題ではなく、合衆国の国民全体の問題として捉えられることになる。そのためキングが最後に取り組んだ貧者の行進では、黒人だけではなく、白人、先住民、ヒスパニックなど、さまざまな人々を巻き込み、そして貧困に苦しむすべての国民のための運動になることが計

画されたのである。

And so I plead with you this afternoon as we go ahead: remain committed to nonviolence. Our aim must never be to defeat or humiliate the white man, but to win his friendship and understanding. We must come to see that the end we seek is a society at peace with itself, a society that can live with its conscience. And that will be a day not of the white man, not of the black man. That will be the day of man as man. (130)

キングが目指したのは、黒人が白人を打ち負かすことではなかった。ましてや両者の溝がさらに深まることでもなかった。キングが目指したのは、アメリカ黒人としてではなく、白人としてでもなく、人間が人間として生きることが可能になる社会であった。自らをそのまま受け入れることができ、また受け入れられる社会を目指そうとキングは呼び掛けたのだ。またそのような社会を目指す運動は、非暴力による運動でなければならないと説いている。

非暴力による運動によって、公民権運動は公民権法という果実を手にした。それでもなお人種差別的体制は残り続けていたため、非暴力という手法に疑問を感じ、暴力を容認するような風潮が特に若者の間で高まりつつあった。「アラバマ・プロジェクト」はまさに、非暴力運動を貫こうとする従来の公民権運動団体と、暴力を用いることを必要悪と考える若い世代とが対峙した運動となった。そのような状況の中、キングは非暴力に徹することを主張してプロジェクトを主導し、セルマからモンゴメリーへの行進でのスピーチでも非暴力であることの価値を改めて主張したのであった。しかしこの後の黒人解放運動は、徐々に暴力を容認する運動へと変容し、非暴力の思想は時代遅れと見做されるようになっていった。

しかしそれでもキングは非暴力であることを諦めなかった。なぜなら暴力

の容認は、非暴力の否定であるだけではなく、白人が運動から離反すること、白人を運動から排除することに繋がるからである。経済的不正義の被害者は決して黒人だけではなく、白人など非黒人も多く含まれている。人間が人間として生きることができる社会の建設を目指す運動が、誰かが参加できない、排除される運動になることをキングは容認できなかったのだ。

キングが貧者の行進に関する計画を発表したとき、非暴力に懐疑的になっていた若者たちへの参加を呼びかけた。そして貧困に苦しむ非黒人にも参加を呼びかけ、アメリカ国民に向かって参加を呼びかけた。そして政府に経済的、政治的な革新のための新たな道を進ませるために必要であるならば、「to use any means of legitimate nonviolent protest」（合法的な非暴力的抗議のためにあらゆる手段を用いること）（*Autobiography*, 347）を決心した。キングは次のように示している。

The time has come for a return to mass nonviolent protest. Accordingly, we are planning a series of such demonstrations this spring and summer, to begin in Washington, D.C. They will have negro and white participation, and they will seek to benefit the poor of both races. (*Autobiography*, 348)

すべてのアメリカ国民が貧困から解放されることを望んでいたキングであったが、その存在について意識的ではなかったグループがあった。それが女性である。黒崎真は『マーティン・ルーサー・キング』において、キングが全米福祉権団体に協力を打診したとき、福祉よりも男性失業者の救済を優先させる男性中心主義的な運動であると非難され、その誤りについて謝罪したこと、そして運動に福祉の視点を新たに取り入れたことなどに触れ、これによりキングは女性を真に運動に含める道を歩み始めたと指摘している（185-

186)。このようにして貧者の行進は、アメリカ国民全体が貧困から解放されることを目指す運動になったのである。

Ⅳ. 平和の実現という夢

キングは常に、問題解決の手段として暴力を用いることに異を唱えてきた。暴力は不信を増幅し、復讐の連鎖を生むだけだからだ。「世界は一つ屋根のもとに」と考えるキングにとって、その理想を実現させるための方法は、ただ非暴力に徹して運動を展開することだった。しかし若い世代が非暴力という手法の妥当性を疑い、連邦政府の公民権に関する関心が薄れる状況にあって、公民権運動は死んだなどと言われるようになっていた。その背景には、ベトナム戦争の泥沼化という問題があった。

当然キングにとってベトナム戦争は容認できるものではなかった。キングは一貫してベトナム反戦の立場であった。そのことを公衆の前で表明したのは、1965年3月ワシントンDCにあるハワード大学でのことだった。北爆が開始された直後で、キングは交渉による解決を訴えていた。その後も折に触れスピーチで反戦の意思が表明されたり、親しい仲間には個人的信条として反戦の意思が語られたりすることはあったが、主要な喫緊の課題として語られることはなかった。戦時下において体制に反対の声をあげることはさまざまな反発を招くことが予想され、公民権運動が停滞することが明かだったからである。キングは公民権運動を前進させるという政治的判断から、反戦の思いを公にすることを控えていたのである。事実、キングが改めて、そして最も明確に反戦の意思表示を行った67年4月以降、白人社会のみならず、黒人社会からも非難の集中砲火を浴びることになった。

「ベトナムを越えて」と呼ばれるスピーチにおいてキングは、反戦の意思表示をすることの意味から語り始める。キングは反戦集会の主催団体が出し

た声明文の一節である「A time comes when silence is betrayal」(沈黙が裏切りを意味する時がある)(140)が、自身の心境と完全に一致していると言う。ベトナム戦争が悪であることを見抜いているにも関わらず政治的判断をもって語ることを控えていたキングは、この声明文に揺り動かされ、体制に順応するふりをして無関心を装うのをやめ、反戦の意思を語らなければならないと考えたのである。そしてキングは「I wish not to speak with Hanoi and the National Liberation Front, but rather to my fellow Americans」(ハノイの人々や民族解放戦線ではなく、アメリカの同胞に語りかけたい)(142)としている。

キングは自身の道徳的観点からベトナム戦争を論ずる理由が7つあるとしている。1つ目は、ベトナム戦争に反対することと公民権運動との間に密接な関係があるためだと言う。

There is at the outset a very obvious and almost facile connection between the war in Vietnam and the struggle I and others have been waging in America. ... I knew that America would never invest the necessary funds or energies in rehabilitation of its poor so long as adventures like Vietnam continued to draw men and skills and money like some demonic, destructive suction tube. So I was increasingly compelled to see the war as an enemy of the poor and to attack it as such. (142)

キングがベトナム反戦を語ろうとすると、「それは黒人のためにはならない」、「公民権運動と平和運動を一緒にすべきではない」、などの非難が浴びせられた。しかしキングはベトナム戦争に反対することは公民権運動を促進させることになると考えていた。なぜならば戦争に多額の予算がつき込まれ、

そして関心がより戦争に向けられることにより、貧困対策などの予算は削減され、公民権運動への関心が薄れていくからだ。まさにベトナム戦争について沈黙することは、公民権運動を停滞させることであり、運動への裏切りなのだ。

ベトナム戦争に反対する2つ目の理由は、戦争が貧困層の人々の希望を破壊し、彼らの生命を搾取しているからである。ベトナム戦争に派遣され、そして死んでいる人の割合は、貧困層に属している人である割合が他の階層の人である割合に比べて高い。そして彼らは、国内では確約されていない自由をアジアの地で守るためにベトナムに派遣され、国内では一緒に学ぶことも同じ区画に住むことも許されていないのに、ベトナムの地では協力して殺人行為を行わされているのだ。「I could not be silent in the face of such cruel manipulation of the poor」（このような残酷な欺瞞に直面して沈黙を守ることとはできない）(143) のだとキングは語る。

第3の理由は、非暴力の運動を前進させるためだとしている。これはキングの体験に基づいている。キングは国内において人種平等を求める若者に対し、火炎瓶やライフルでは問題を解決することができないことを説いてきた。しかし彼らはキングに、「What about Vietnam?」（ベトナムはどうか？）(143) と問い返したと言う。政府はアメリカの正義を主張し、拡大するために暴力を用いているという現実を眼を背け、非暴力の必要性を訴えることなどできないとキングは考えたのだ。

「To save the soul of America」（アメリカの魂を救うこと）(144) を第4の理由としてキングは示す。これはキングたちが南部キリスト教指導者会議を結成したときに掲げた目標である。アメリカの魂とは民主主義である。その魂がアメリカ黒人には適用されていなかった。だからキングたちは民主主義を守るために運動を開始したのである。しかしこの目標は、アメリカ黒人の問題にだけに適用されるものではない。アメリカが真にアメリカであるこ

とを願うキングは、民主主義を無視し、破壊する行為すべてに反対するのであり、それゆえにベトナム戦争に反対しているのである。

さらにキングは5番目の理由としてノーベル平和賞受賞者としての責任、6番目の理由としてキリスト教の伝道者としての使命をあげている。最後に第7の理由として掲げるのは「my conviction I share with all men the calling to be a son of the living God」(生ける神の子として生きよという招きをすべての人と共有するという使命)(145)である。この神からの命令は、人種や国家、信条への忠誠を越えるものであり、人類愛に生きよという命令なのだと言っている。神のもとではすべての人が平等なのであり、その社会的な属性によって優劣が判断されることはない。そしてこの命令に従うとき、声なき者、か弱き者など、合衆国によって傷つけられている人びとの代弁者として声を発する使命があるのだとしている。

ここで特に着目すべきなのは、キングの主張が他者の声を聴くことの必要性を強調していることだ。ベトナムで戦争をしなければならない理由を、合衆国政府は共産主義勢力の拡大を防ぐためだと説明する。しかしベトナムの民衆の側からこの戦争に介入する合衆国を見るならば、それはとても奇妙な姿に映るだろうとキングは指摘する。ベトナムの人々が独立を宣言するときに引用したのは、アメリカの独立宣言であった。つまりベトナムの人々はアメリカの魂を根拠に独立を宣言したのだ。しかし合衆国政府はそれを認めず、フランスが再植民地化することを支持したのであった。アジア諸国を劣ったものとみなす西欧的な傲慢さの延長線上にベトナム戦争は行われることになったのだ。別の視点から物事を見つめたとき、まったく異なる姿が湧現する。多面的に考え、理解することの必要性をキングは示したのである。

この点について『マーティン＝L＝キング』の著者である梶原寿は、「キングが彼の非暴力哲学を徹底化し、ブラック・パワーの信奉者たちへの共感を、国家暴力の発動であるベトナム戦争に反対することによって表示しただ

けでなく、彼はその非暴力哲学を、さらに「敵の視点」からの問いかけに耳を傾ける努力にまで」(204) 昇華させたとしている。キングはベトナム反戦を訴えることを通じて、非暴力を時代遅れと考える風潮の中で非暴力による運動の哲学を進化させたのである。

We must continue to raise our voices and our lives if our nation persists in its perverse ways in Vietnam. We must be prepared to match actions with words by seeking out every creative method of protest possible.
(155)

いかなる状況にあろうとも、声を上げ、行動をし続ける必要性をキングは訴えたのである。まさに不正に対して沈黙することは、正義に対する裏切り行為なのである。

V. キングの夢とは

ノーベル平和賞を受賞したキングは、人種的不正義の撤廃というアメリカ黒人の解放運動に加えて、全ての人のための権利のための運動を視野に入れ、活動の範囲を拡大させることになった。この運動において特に着目したのが、投票権法の制定、貧困の撲滅、そしてベトナム反戦運動であった。キングは時とともに運動の到達目標を拡大していくわけだが、運動の方針として非暴力を重視することにはこだわり続けていた。むしろ非暴力が時代遅れとされる風潮の中であってキングは、若い世代の意見に理解を示しつつ、非暴力の意義を説き続けることで、非暴力という運動手法を進化させていったのである。

キングが運動の目標を拡大させたことは、何を意味するのかについて注意

する必要がある。公民権運動が制定を求めた公民権法は、合衆国南部の人種隔離政策に終止符を打たせることが一義的な目的であった。運動の過程において国内外から関心が寄せられ、北部の市民も参加するようになった運動であり、連邦政府を動かした運動であった点においては全国的な運動であったかもしれない。また北部社会においても人種差別的な慣行が存在していたことも確かである。しかし公民権法の意図から考えるなら公民権運動とは、人種隔離政策を行っている合衆国南部の地域的な運動であったのだ。

しかしキングが投票権法の制定を運動の中心的な目標として明確化したとき、黒人解放運動は合衆国南部の地域的な運動から、合衆国全土を対象とした運動に変化したことになる。公民権法が定めたのは法的な平等という問題であり、法的に二級市民とされることに終止符を打つことだった。しかし投票権が定めるのは有権者登録が平等に行われるための体制を確立することであり、それが意味するのは法的な意味における平等のみだけではなく、アメリカ黒人が権利を実質的に行使することを認めることでもあった。この意味においてその影響を受けるのは、合衆国南部の黒人だけではなく、合衆国全土の黒人であった。つまり投票権法の獲得を具体的に目指すキングの夢は、地域的で形式的な平等を求めるものから、全国的で実質的な平等を求める主張へと変わったのである。

キングが貧困の撲滅を視野に入れた活動を開始したとき、求める内容はさらに拡大されることになる。既にみたように貧困の撲滅を求めることは、アメリカ黒人のための運動から、貧困層の白人市民を対象に含めた運動へと変わることを意味した。この点においてキングが率いる運動は、人種的不平等の撤廃を求める運動から、すべてのアメリカ人の権利を求める運動へ変化したことになる。つまりキングの運動は、アメリカ黒人の実質的な市民権の行使を求める運動から、アメリカ人の人権を求める運動になったのである。

この人権を求めたキングの主張は、ベトナム反戦を訴えることによって、

さらに拡大されることになった。キングはベトナムの側の主張を黙殺するのではなく、耳を傾け、多面的に問題を理解する必要性を訴えた。こちら側とあちら側に分断するのではなく、同じ人間として人権が守られることの必要性を訴えたのである。キングが求める人権の対象となるのは、アメリカ人の人権から、世界の市民の人権へと拡大したのだ。そして合衆国政府がアメリカの魂としての民主主義を守り、その原則に従って行動することを求めたのである。

キングの目標の拡大は、合衆国政府との関係性をも変化させることになった。目標を人種的不正義の是正のみに限っていたとき、合衆国政府は目標達成のための共闘の相手だった。合衆国政府の協力、理解がなければ、法的な平等の達成は望めなかったからである。また貧困の撲滅という目標の場合にも、政府に新しい行動や対策を求める運動であり、この意味で合衆国政府は協力者でなければならなかった。しかしベトナム反戦運動において合衆国政府は共闘すべき相手ではなく、人種的不正義や貧困問題から眼を背ける存在であり、民主主義を守るという名目のもとに民主主義を破壊する敵であった。つまり合衆国政府は、キングにとって批判すべき対象なのであり、両者の間に深い溝を作ることになった。この構図はアメリカ黒人の指導者の眼には人種的平等達成の道を遅らせているように映り、公民権運動を支援してきた穏健な白人の眼には戦時体制という非常時に国の一体感を損ねる行為に映った。その結果キングの運動は、孤独なものになってしまった。

最後に、キングの夢は本当に変化したのかについて改めて考えておきたい。確かに聴衆に直接的に語り訴えかけた目標は、形式的平等から実質的平等、市民権の問題から人権の問題、権利の問題から民主主義の問題へと変化した。しかしそれは前者の問題解決をより確実なものとするためであり、基本的な主張を変えているわけではない。またキングが指導者として初めて登場したモンゴメリーでの運動においてキングは、これから始めようとする運動がア

アメリカ民主主義によるものであり、民主主義の原理に従って政府が働くことの期待を述べている。またキングの夢は、常にすべての人が兄弟姉妹として生きることができる社会の建設であった。そしてキングは、これらの夢が非暴力という手法によって達成されるべきであることを主張し続けてきた。このように考えるなら、キングが語る夢が変化したのではなく、強調点が変わっただけなのである。

I am convinced that if we are to get on the right side of the world revolution, we as a nation must undergo a radical revolution of values. We must rapidly begin ... the shift from a thing-oriented society to a person-oriented society. When machines and computers, profit motives and property rights, are considered more important than people, the giant triplets of racism, extreme materialism, and militarism are incapable of being conquered. (157-158)

1960年代は合衆国のみならず、世界にとって変革の時代であった。その変革を推し進めようとするとき、その道が正しい方向へと進んでいるのかを常に問い続けなければならない。独りよがりな正しさに固執してはならないのである。また変革という大義のために、誰かが置き去りにされ、忘れ去られ、犠牲にされることがあってはならないのだ。キングが求め続けたのは、人間が中心に据えられた社会の建設である。それを阻む人種差別主義、物質主義、そして軍事主義という常に犠牲者を輩出し続ける三悪に打ち勝つことこそが、キングの夢だったのだ。

ま と め

キングの夢は、共産主義的な価値観によって作り出される社会でもなければ、資本主義的価値観によって作り出される社会でもなかった。キングが理想としたのは、共産主義や資本主義が忘れ去り、置き去りにしている人間を中心に据えた社会だった。そしてその社会は、人間が人間として扱われる兄弟愛の社会でもあった。そのような社会を作り出すためキングは、自分たちの正義を絶対視し、それを守ることを名目にアメリカ黒人やアジアの人々を抑圧し、声を無視する合衆国を建て直す必要があると考えていた。また理想の社会を作り出すため、合衆国を支配している根源的な悪を取り除くことを目指していたのだ。

What I'm saying to you this morning is communism forgets that life is individual. Capitalism forgets that life is social. And the kingdom of brotherhood is found neither in the thesis of communism nor the antithesis of capitalism, but in a higher synthesis. It is found in a higher synthesis that combines the truths of both. Now when I say questioning the whole society, it means ultimately coming to see that the problem of racism, the problem of economic exploitation, and the problem of war are all tied together. These are the triple evils that are interrelated. (194-195)

キングは夢を実現させるため、人種主義、物質主義、軍事主義を根絶することを目指した。これらの三悪は独立して存在する悪なのではなく、相互に関連し合った一体の社会全体の問題として存在しているからだ。つまりこれらの関係性に留意しながら、そして同時に解決を目指さなければならない間

題だったのである。キングが人種主義の問題を語るとき、それを支えている貧困や戦争、暴力の問題が常に意識されていたのだと言える。キングは自身の信念によって行動するとき、それが国家との敵対を意味することになったとしても、戦争の問題、貧困の問題に着手しなければならなかった。それがなければ、キングが目指す兄弟愛の讃歌が歌われる社会の到来はあり得ないからだ。

このように考えるとき、冒頭で紹介したような人種平等のために非暴力の運動を指導した人物という評価は、キングの重要な一面を示しているに過ぎないことになる。貧困の撲滅やベトナム反戦という、人種という枠を超えてより多くの人々のための運動に取り組んだ（少なくとも取り組もうとした）という、もう一つの重要な一面を見逃してしまうことになるのだ。またそれは現代社会にも適用し得る批判的な視点を削ぐことに繋がる。

「マーティン・ルーサー・キング二世」を執筆したデーヴィッド・ルイスは、晩年のキングを次のように記している。

キングは、アメリカ合衆国全土で起こりつつあったことを現実的かつ人道的な方向へと導く計画と手段を持ち合わせた、現実主義者に成長していた。(中略) キングが最晩年に示した提案は、将来的に有望であった。それは、人種差別を受けてきた人々、経済的に搾取されてきた人々、政治に憤りを覚えてきた人々を、人種や階級を越えて闘争の前線に集結させる提案であった。この提案は、キングには、指導者としての自身の裁量の姿を認識させ、左傾化の度合いを調整していた実用主義者には、洗練された穏健な真の社会進歩のための基盤を築く上で、より望ましい選択肢を提示した。(507-508)

キングが示した提案は、分断化がますます進み、他者を省りみない今日の

社会においても有効なのである。

「わたしには夢がある」と語ったキングを脱政治化、神格化させて公共の記憶にすることの背景に、合衆国内の政治的な意図があったことは既に多くの研究によって指摘されている。しかし日本で暮らす者がその意図に従い、受け入れる必要は全くないだろう。むしろノーベル平和賞の受賞者として世界に声を発しようとしていたキングの意図を汲むことが、合衆国の外部に身を置く者の責任だとも言える。世界、日本が見せかけの共生を隠れ蓑に、搾取や分断が推し進められ、暴力を否定するパフォーマンスの影で、暴力化をおし進める現在の状況を考えるなら、削ぎ落されてしまったキングの主張に積極的に耳を傾け、キングの未完の夢を実現させるための努力がますます求められていると言えるだろう。

キングが暗殺される前日、次のように聴衆に呼び掛けている。

Let us rise up tonight with a greater readiness. Let us stand with a greater determination. And let us move on in these powerful days, these days of challenge, to make America what it ought to be. We have an opportunity to make America a better nation. (219)

世界を兄弟愛の世界に変える力が市民にはあるのだとキングは呼び掛けている。またキングは別のスピーチで、「How long? Not long.」（それはいつか。まもなくだ）(131)とも語りかけている。キングの暗殺から半世紀が過ぎた今日、世界はキングの夢にどれほど近づいたのだろうか。神格化されたキングではなく、脱政治化されたキングでもなく、改めてキングが示した夢の全体像について考え、キングの夢を引き継ぐ必要があるだろう。

〈註〉

(1) Ronald Reagan, "Remarks on Signing the Bill Making the Birthday of Martin Luther King, Jr., a National Holiday" November 02, 1983. (<https://www.presidency.ucsb.edu/documents/remarks-signing-the-bill-making-the-birthday-martin-luther-king-jr-national-holiday>) を参照。2019年3月1日閲覧。

(2) キングを公共の記憶に定位させようとするとき、キングの主張の政治性が脱政治化されて、歪曲されてしまうことの危険性については、キング牧師記念日制定の直後から指摘されてきた。それらの議論について分析した先行研究には、Drew D. Hansen, *The Dream: Martin Luther King, Jr., and the Speech that Inspired a Nation*. (New York: HarperCollins Publishers, 2003.)、大類久恵「公的歴史としての「M・L・キング」：キング祝日制定過程および記念祝賀で描かれたキング像」(『史境』第44号、2002年)、黒崎真「米国におけるキング牧師連邦祝日制定と非暴力という遺産」(『神田外語大学紀要』第21巻、2009年) などがある。

(3) モンゴメリー・バス・ボイコット運動。1954年12月、アラバマ州モンゴメリーのバスの中で白人に席を譲ることを拒否したアメリカ黒人女性ローザ・パークスが逮捕された。この事件がきっかけとなり、バスの中の人種隔離の違憲性を問う法廷闘争が行われることになった。また法廷闘争を支援し、バスの中での人種隔離に抗議することを目的に、バス・ボイコット運動が行われることになった。この一日限りのボイコット運動を呼びかけたのは、女性政治評議会会長のジョー・アン・ロビンソンだった。ボイコット運動を成功させた市民は、バスの中の人種隔離が違憲であるとの判決を勝ち取るまで、ボイコット運動を続けることにした。運動を指導する組織としてモンゴメリー向上協会が結成され、会長として選出されたのがキングだった。キングはボイコット運動の続行を決めた会場で、この運動を非暴力直接抵抗運動として展開することを提案し、その後の運動の基本的方針とした。

(4) キングのスピーチの引用は、Clayborne Carson と Kris Shepard が編集した *A Call to Conscience: The Landmark Speeches of Dr. Martin Luther King, Jr.* (Warner Books, 2001) を用いた。なお本書から引用する場合、当該頁数のみを() 内に示すことにする。また下線による強調は引用者による。以下同じ。

(5) アラバマ・プロジェクト。アラバマ州ダラス郡の郡庁所在地セルマでは、1933年に組織されたダラス郡投票連盟が中心となり、有権者登録運動を行っていた。しかし連盟の活動の甲斐なく、セルマの黒人住民14,500人に対し有権者登録されていたのは300人に満たなかった。黒人にも恣意的に運用される「識字テスト」などにより、黒人の有権者登録が妨害されていたのだ。62年、連盟の創設者の一人であるアメリア・ポイントン・ロビンソンは、状況を打破するために学生非暴力調整委員会 (SNCC) と南部キリスト教指導者会議 (SCLC) に支援を要請していた。

それに即座に応えたのは、SNCC だったが効果はあがらなかった。それどころか、「よそ者」が州内を「荒らす」のを快く思わない公権力は、64年7月公民権に関する集会の開催を禁止し、SNCC による活動も停滞せざるを得なくなってしまった。そこで連盟の会長フレデリック・リースは改めて SCLC に支援を要請し、キングは65年1月2日、運動を開始することを決めた。最初の支援要請があった62年から、セルマでの運動開始を決意するまでの間、1963年のワシントン大行進、そして64年には新公民権法が成立しており、公民権運動の当初の目的であった人種隔離の撤廃は法律上は達成されていた。それでも実質的な人種による不平等が解消されず、解決のためには有権者登録の確実な実施と、それを保障する投票権法の制定が必要だとキングは確信するようになっていた。

(6) 2月1日、投票権を求める行進を行ったキングは、参加者200人と共に逮捕、投獄される。2月18日にはセルマに隣接するペリー郡マリオンで行われた夜の集会と行進を、州と地元の警官が白人の暴徒と共に襲いかかった。その結果、黒人青年ジミー・リー・ジャクソンは祖父と母を暴力から守ろうとして警官に射たれ、26日、病院で亡くなった。マリオンの黒人市民はセルマから州都モンゴメリーまで抗議のためデモ行進を行うことにした。

3月7日、500人以上からなる行進隊はモンゴメリーを目指してブラウン・チャペルを出発した。途中、行進隊を州兵隊、民兵隊が襲いかかり、約80人が負傷し17人が重傷で病院へ運ばれた。この様子は、全米のテレビで放映され、翌日の朝刊では写真入りで記事が掲載された。この事件は「血の日曜日」と呼ばれている。

キングはこの事件を受け、二日後の9日、再び行進を行うことを宣言し、全米の良心に対し、行進に参加するよう訴えかけた。この訴えに主婦や学生、運動家などが応え、9日の行進隊は2,000人に膨れ上がっていた。途中、州兵隊などと対峙することになったキングたちは、跪き、祈りを捧げ、We shall Overcome を歌い、引き換えた。この場での惨事を避けることはできたが、その日夜、悲劇が訪れた。支援のために北部から駆け付けた三人の白人の牧師が、白人の暴徒によって襲撃され、そのうちの一人である、ボストンからやってきたジェームズ・リーブが二日後に亡くなったのだ。

リーブの死は、さらなる社会からの注目を集めることになり、投票権法の制定に否定的だった大統領リンドン・ジョンソンをついに動かすことになる。15日、連邦議会でジョンソンは投票権法の立法化を議会に求めるスピーチをし、17日には連邦裁判所が行進の許可を下し、ウォーレス州知事には行進の護衛を命じた。しかし知事はそれを拒否したので、大統領が州兵を連邦軍に再編し、護衛の任務にあたさせた。その結果セルマからモンゴメリーの約80キロを、21日から25日の5日間をかけて行進した。行進のスタート地点となったブラウン・チャペルには3,000人が集ま

り、その後は毎日300人ずつが行進を続け、最終地点であるモンゴメリーの州議事堂前には25,000人が集結していた。

(7) [] 内は引用者。

(8) 貧者の行進。人種の壁を越えて貧困に苦しむ人々をワシントン DC に結集し、連邦政府に対して抗議の意を示し、具体的な解決策、行動を引き出すことを目的にした非暴力直接抵抗運動として企画された。

(9) メンフィスの黒人清掃作業員たちは、非常に劣悪な環境で働かされていた。そのような中、安全性を十分に確保されていないゴミ収集車に黒人作業員が巻き込まれ死亡する事故が発生した。彼らが黒人であったために、遺族に対して十分な慰謝料が支払われることもなく、また作業員の労働環境が改善されることもなかった。このような状況に抗議し、黒人労働者たちはストライキを行うことにした。

(10) キング暗殺後、妻のコレッタや同僚のアパナシーなどの協力により、ストライキを支援するデモ行進は実現された。また「貧者の行進」もアパナシーなどの尽力で実現した。

参考引用文献

- Carson, Clayborne et al. eds. *A Call to Conscience: The Landmark Speeches of Dr. Martin Luther King, Jr.* New York: Warner Books, 2001.
- Carson, Clayborne. ed. *The Autobiography of Martin Luther King, Jr.* New York: Warner Books, 1998.
- コーン、ジェイムズ・H (梶原寿訳) 『夢か悪夢か・キング牧師とマルコム X』 日本基督教団出版局、1996年
- フレイディ、マーシャル (福田敬子訳) 『マーティン・ルーサー・キング』 岩波書店、2004年
- ルイス、デーヴィッド・レヴァリング「マーティン・ルーサー・キング二世：非暴力民衆主義の約束」 ジョン・ホープ・フランクリンほか (大類久恵ほか訳) 『20世紀のアメリカ黒人指導者』 明石書店、2005年：465-511頁
- マイヤーズ、ウォルター・ディーン (石松久幸訳) 『自由を創造した人々の闘い アフリカ系アメリカ人』 三一書房、1998年
- クォールズ、ベンヤミン (明石紀雄ほか訳) 『アメリカ黒人の歴史』 明石書店、1994年
- 梶原寿 『マーティン=L=キング』 清水書院、1991年
- 黒崎真 『マーティン・ルーサー・キング：非暴力の闘志』 岩波新書、2018年
- 上坂昇 『キング牧師とマルコム X』 講談社現代新書、1994年
- 猿谷要 『キング牧師とその時代』 NHK ブックス、1994年